

聖書:テサロニケ人への手紙第一 2章1~12節

説教:母親として父親として

はじめに

前回は、パウロがテサロニケ教会が抱えていた課題についてアドバイスするためにこの手紙を書きました。私たちは、パウロほどではないにしても友人や教会の仲間から相談や悩み事を打ち明けられることがあって、そんなときどのようにアドバイスすればよいのかと悩むことがあります。おそらく今日の箇所はそんな方々にとって大きなヒントになると思います。

前回は、手紙の冒頭部分で、パウロが教会をどのように励ましたかを見てまいりました。今日の箇所から少しずつテサロニケ教会の問題を具体的に取り扱いっていくわけですが、パウロは慎重な人ですのでいきなり本題に入りません。まずは本題に入る前に準備をします。それが今日の箇所になります。

1 「知っているとおり」

ここを読んでいて、パウロが同じことばを繰り返していることに気がついた方もおられるかも知れません。1節。「あなたがた自身も知っているとおり。」2節。「ご存じのように。」5節。「あなたがたも知っているとおり。」9節。「あなたがたは(中略)覚えているでしょう。」11節「あなたがたも知っているとおり。」なぜこんなに繰り返すのか。

パウロがテサロニケにいた期間はわずか数週間という短い期間でしたが、信じる人たちが次々と起こされました。いっばう、それに比例するようにユダヤ人からの迫害がエスカレートしていきます。そんなとき教会はどうなるかと言えば、危機的なときほどパウロを中心にして結束していくわけです。ところが、パウロが去るとどうなるでしょう。時間とともにだんだん記憶から遠ざかっていく。それがあるとき突然のように記憶が薄れた相手から突然手紙が来る。それも厳しい内容です。きちんと受けとめてもらうには、お互いの信頼関係がなければできません。それでどうしたか。原点に戻り、「あなたがたもご存じのとおり」という言い方をしながらかつての信頼関係を取り戻すところからはじめます。

2 パウロ

1) 神によって認められている

その思い出すこととして、パウロはいくつかのことを語っています。その中でもポイントとなるのは4節であろうと思います。「むしろ私たちは、神に認められて福音を委ねられた者ですから、それにふさわしく、人を喜ばせるのではなく、私たちの心をお調べになる神に喜んでいただくとして、語っているのです。」

日本語で読むとわかりませんが、この短い文章の中に同じことばが二度繰り返されています。「神に認められて」の「認める」ということばと、「私たちの心をお調べになる神に」の「調べる」。この二つが同じことばです。

なぜこのことばを使うのか。例を挙げます。皆さんは、他人からなにか厳しいことを言われたり忠告を受けたりしたときどう思いますか。素直に聞ける人はまずいないでしょう。「何様だと思っっているんだ。」「そんなにあなたは偉いのか。」「そんなに言うなら自分でやってみたらどうだ。」憎まれ口の一つや二つ、実際に口には出さなくても心の中でつぶやいたりします。これが手紙とか、今ならメールやラインのように文字に書かれると、もっとインパクトが強くなる。ですから書くときはかなり慎重にことばを選ばなければならない。

2) 神は、私たちの心を調べる

パウロはそれを考えています。手紙を読んだ人たちが、「そんなことを言うおまえは何様なのか」と反発することを事前に予想している。それでパウロは先手を打って、自分たちは何者であるのかを言うわけです。「私たちは神に認められて福音をゆだねられている者である。」「認められて」というのはなにか免状のようなものをもらったというのではない。先ほどの触れたように、「神によって調べられた」者であると言い換えることもできる。何を調べられたか。自分の心を調べられた。いつどのように調べられたのか。さかのぼれば、パウロがよみがえられた主に出会ったあのダマスコ途上、天からまぶしい光があつて地に倒れたとき、彼はこのように語る主の声を聞いたときが最初です。「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。」自分は他の誰よりも熱心に神を愛していると思っていたのに、あなたは神を迫害していたのだという主の御声を聞きました。神によって心を調べてもらったからこそ、自分の罪に気がつきま

した。その日以来今日まで毎日ずっと、彼は主によって心を調べられていると意識しています。福音をゆだねられている者である以上、そのことが自分の務めであると自覚しています。

3) 自分の心を調べる

こんなふうに言うところの方は不安に思うかもしれません。「毎日神さまから心を調べられるなんて息がつまりそうだ。そんな神さまなら信じたくない。」

もちろんそれは誤解です。詩篇139篇23, 24節にこう書かれています。「神よ 私を探り 私の心を知ってください。私を調べ 私の思い煩いを知ってください。私のうちに 傷のついた道があるかないかを見て 私をとこしえの道に導いてください。」

私たちはだれでも、根拠があるわけではないに自分は健康であると思ひ込みたいわけですが、でも本当にそうなのかは健康診断をして調べてもらわなければわからない。それと同じように、私たちは神さまに調べてもらって健康診断をしていただき、それで初めて正しい道を歩んでいけるわけです。

ではどのようにして調べてもらうのでしょうか。難しいことではない。自分の中にもう一人の自分がいて、少し離れたところから自分のことを観察する。そういう視点でいつも自分を振り返るのです。パウロの場合はどうであったか。彼は自分のことを幼子、母親、父親という三つの視点で見えています。

4) 幼子になった

まず一つ目。7節前半。「キリストの使徒として権威を主張することもできましたが、あなたがたの間では幼子になりました。」

パウロは使徒として召された者でした。けれども彼は使徒としての権威を主張せず。むしろ幼子になったと言います。では幼子とはどんな態度であったのか。6節を指しています。「また私たちは、あなたがたからも、ほかの人たちからも、人からの栄誉は求めませんでした。」

幼子は大人から栄誉をもらうことはありません。もらうのは大人です。パウロは幼子となったので自分の栄誉を求めない。むしろ栄誉を受けるべきなのはあなたがたであると考えながら接していた。そのことは実際に19、20節に書かれています。「私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのは、いったいだれでしょうか。あなたがたではありませんか。

せんか。あなたがたこそ私たちの栄光であり、喜びなのです。」

5) 母親のように

次に二つ目。7節後半、8節。「私たちは、自分の子どもたちを養い育てる母親のように、あなたがたをいとおしく思い、神の福音だけではなく、自分自身のいのちまで、喜んであなたがたに与えたいと思っています。あなたがたが私たちの愛する者となったからです。」

母親は、子どもが助かるならば自分のいのちを差し出してもよいとさえ考えます。それと同じようにパウロはテサロニケの人たちのことをまるで自分の子どものようにみことばによって養い育ててきたと言います。

6) 父親のように

三つ目は11, 12節。「また、あなたがたが知っているとおりに、私たちは自分の子どもに向かう父親のように、あなたがた一人ひとりに、ご自分の御国と栄光にあずかるようにと召してくださる神にふさわしく歩むよう、勧め、励まし、厳かに命じました。」

日本の文化は西洋に比べて何でも受け入れる母親の性質が強く、父親のように物事をはっきりとさせることは苦手であると言われます。そのすべてが悪いわけではないのですが、特に子どもが問題を起こしたときに父親としてきちんと子どもを叱ったりいさめることができるのか。父親がそれができないと子どもが思春期になったときに様々な問題が起きることを聞きます。子どもを育てるためには母親と父親、両方のバランスが必要だと知っています。

パウロは、神によって心を調べられた経験をとおして、常に自分のことを子ども、母親、父親、この三つの視点から振り返りました。それはもちろんひとりよがりではありません。あなたがたもそのことを覚えているでしょう、と第三者から見ても確かにそのとおりと認められているのかどうか、そのこともパウロは意識しながら語っているところがたいせつです。

さて、このことは私たちにどんなことを教えるのでしょうか。最後にそのことに触れていきます。

3 神の姿

1) よき励まし手になりたいのだが

私たちがいまパウロのような立場に置かれることはなくても、例えば友人から悩み事を打ち明け

られ、相談されるというようなことはしばしばあります。そんなときどうしていただいでしょうか。よかれと思って言ったことがかえって相手を怒らせてしまったり、傷つけたり、まったく的はずれのこと言ったり、私はそんな失敗を繰り返しています。どうしたらもっと的確なアドバイスや、励ましができるだろうか。悩む方の友人となれるのだろうか。そのヒントを知りたいと思っているのは私だけではないと思います。

2) キリスト

パウロは自分のことを幼子、母親、父親であるという三つの立場を意識しながらテサロニケ教会とか関わり続けたと言います。考えてみるとこれはイエス・キリストの性質そのものでもあったわけです。この方は、弱っている者、悩む者、子をなくした者のところへ駆け寄りみことばを語りながら人々を養い、励ましてくださいました。いっぽうこの方は、罪に対してはいっさいの妥協することはありませんでした。むしろ、まるで父親のように厳しく立ち向かわれました。その結果、この方は裸にされ、むち打たれ、何も持たず、すべての榮譽を剥ぎ取られ、十字架の上で幼子の姿とられました。そのようにして罪人である私たちのよき友人となってくださいました。

このことから私たちは教えられます。だれかに関わっていくとき、私たちはまず私たちは神によって心を調べてもらう必要がある。それは自分を振り返るという作業につながっていく。自分は子どもなのか母親なのか父親なのか。いまそのうちのどの役割が必要なのか。相手の必要を知るためにはまず自分のことを知っていなければなりません。

一朝一夕でできるものではない。何度も失敗します。失敗するたびに、イエスがこんな難しい相手である自分にも、よき隣人として、よき励まし手となり、友人としてかわり続けてくださっている。その恵みを思い起こします。